添付資料　　２時間目に配布した資料

やなせたかし氏「アンパンマン」誕生の背景について

　ヒーローとしてのアンパンマンが誕生した背景には、やなせたかしの従軍経験がある。戦中はプロパガンダ製作に関わっていたこともあり、とくに戦いのなかで「正義」というものがいかに信用しがたいものかを痛感した。

　しかし、これまでのヒーローは「正義」こそ口にするが飢えや空腹に苦しむ人間へ手をさしのべることはしなかった。戦中、戦後の深刻な食糧事情もあり、当時からやなせは「人生で一番つらいことは食べられないこと」という考えをもっていた。

　50代で「アンパンマン」が大ヒットする以前のやなせは売れない作家であり、空腹を抱えながら「食べ物が向こうからやって来たらいいのに」と思っていたという。こういった事情が「困っている人に食べ物を届けるヒーロー」という発想につながった。

　アンパンマンと「正義」というテーマについて、やなせは端的に「『正義の味方』だったら、まず、食べさせること。飢えを助ける。」と述べている。

　また別のインタビューでも、やはり「究極の正義とは飢えている人に食べ物を与えることである」と述べている。さらに主人公をあんパンにした理由を「あんぱんは日持ちがする。そして外の皮はパン＝西洋、内側はあんこ＝純日本。見た目は西洋でも心は日本人である。」と解説している。

　空腹の者に顔の一部を与えることで、悪者と戦う力が落ちると分かっていても、目の前の人を見捨てることはしない。かつそれでありながら、たとえどんな敵が相手でも戦いも放棄しない。

　これらの点について「ほんとうの正義というものは、けっしてかっこうのいいものではないし、そしてそのためにかならず自分も深く傷つくものです」（第１作『あんぱんまん』のあとがきより）と語っている。「飢えている人に食べ物を差し出す行為は、立場が変わっても国が違っても「正しいこと」に変わりません。絶対的な正義なのです。」と語っている。

　そしてアンパンマンは食べられることはあっても、食べることはない。それは単純にアンパンマンが食事をする場面が一度も描かれないことにも現れている。自らを食事としてのみ差し出す自己犠牲こそがアンパンマンの正義なのだ。

Wikipedia「アンパンマン」より引用